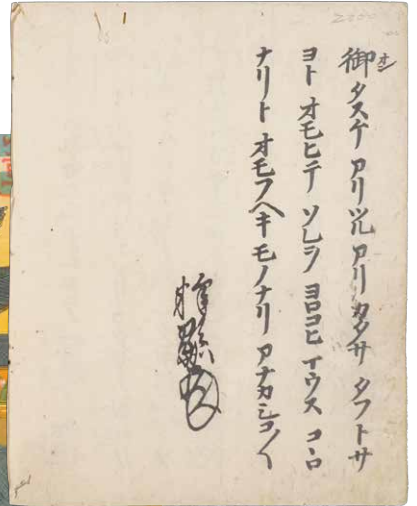
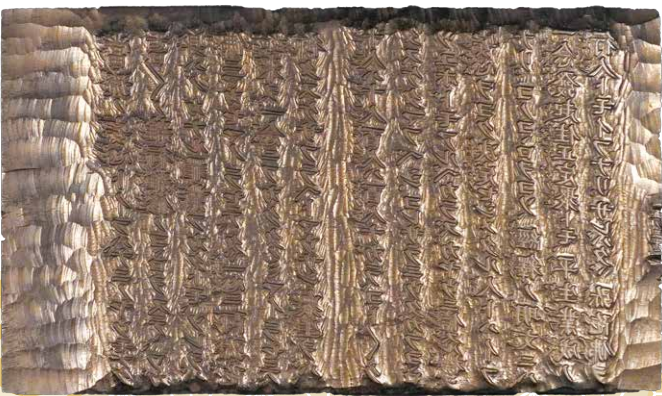


すり出された カミ・ホトケ

— 出版からみた仏教文化 —



①



はじめに

本研究所では、「同朋大学仏教文化研究所規程」によると、「広く仏教文化の研究と興隆に寄与し、もって地域社会に貢献することを目的」とし、その達成のために「仏教文化に関する資料及び情報の収集と整理」が事業の一つに掲げられています。そのため開所以来、浄土真宗を軸とする貴重な仏教関連史料を寄贈や購入によって収集し、その一部を史料展示や各種刊行物の形で学術的に紹介しています。

特に、『同朋大学仏教文化研究所報』三〇号（二〇一七年刊）に「黄檗版一切経」と「宣如判五帖御文」が本研究所に寄贈されたことを史料紹介したように、この五年間で仏教文化を考える上で重要な出版された聖教や経典等が数多く本研究所の収蔵品となっています。

さらに、今年刊行の同報三五号では、新収蔵史料として木版の御文（「顕如判御文」と「准如判御文」、「良如判御文」とあわせて、真宗聖教「歎異抄」と「御文」の版本が紹介されています。

このように仏書（仏教関連書籍）の版本のみならず、それらの版本も蔵品となるなど、本研究所の仏教関連の出版史料のコレクションはさらに充実しつつあるといつてよいでしょう。

ところで、同朋大学・名古屋音楽大学図書館

には、「山田文昭コレクション」と呼ばれる法隆寺一切経をはじめとする貴重な仏教関連の古典籍群が収蔵されており、そのなかにも多数の出版された仏書が含まれています。

そのため本研究所では、二〇一六年度に前期史料展示として「聖教はよみやぶれ：―来て見てさわつて真宗文化―」と題した仏書の展示を、二〇一七年度後期史料展示として「お経のかたち―来て見てさわつて仏教文化―」と題した経典の展示を開催するなど、本研究所を含む同朋学園が所蔵する貴重な仏教関連史料を展示しています。それらの展示でも出版された仏書が数多く出陳されています。

そもそも、世界最古の現存する印刷物は、称徳天皇の発願による「百万塔陀羅尼」とよばれた奈良時代の経典であるように、日本の出版文化史上における仏教との関係は古代から存在し、それは現在まで脈々と密接に繋がっています。

しかしながら、出版と仏教の関係は、一般的には広く認識されているとはいえないのではなからうか。

そこで本研究所では、仏書などの出版史料に焦点をあて、仏教と出版をめぐる文化史的側面を取り上げる展覧会を企画しました。

特に今回は、「印刷された仏書」、「近世・近代の出版と親鸞のイメージ」、「出版にみる寺社空間とネットワーク」、「神仏を感じる身近で意外な摺物」、という四つの展示構成から、以上の課題解決の糸口に迫ってみたいと思います。

【付記】

一、本書は、同朋大学仏教文化研究所二〇二二年度前期史料展示「すり出されたカミ・ホトケ―出版からみた仏教文化―」展の解説パンフレットである。

なお、展示の会期・会場は、次のとおりである。

【会期】二〇二二年七月九日（土）～七月三十一日（金）。

【会場】ギャラリーDo（同朋学園Doプラザ閣蔵一階）。

一、本書の編集は、同朋大学仏教文化研究所にて行った。作業担当（ローマ数字は執筆担当章）は次の通りである。担当主任：千枝大志【所員】

解説執筆：千枝大志・I・II・IV、川口淳【所員】III

写真撮影：川口淳、千枝大志

一、本書には、全ての展示史料の写真は掲載（○数字は写真の掲載順を示す）されていない。なお、所蔵者表記の無い史料は全て個人の所蔵品である。

一、展示史料の寸法は縦cm×横cm×高cmで表現した。

一、本書には、文部科学省科学研究費・基盤研究（C）「日本初の紙幣『山田羽書』誕生の地『伊勢神宮地域』をめぐる中近世社会経済史の再構築」（研究代表者千枝大志、二〇二二～二〇二四年度、課題番号：二二K〇一六〇三）の研究成果の一部が含まれている。

一、開催にあたり、以下の皆様の協力を得た。記して深謝申し上げる（敬称略・五十音順）。青木馨、安藤栄、安藤弥、川口賢司、末松憲子、服部仁、横地誠人

I 印刷された仏書

本章では、「山田文昭コレクション」の仏書、「出版された仏書と版木」の二つのサブテーマから、印刷物としての仏書の歴史を概観する。

出版は、手書きに比べテキスト(本文内容)を一定化させて仏書を大量に作成するには適した技法である。そのため、奈良期の「百万塔陀羅尼」以降、平安後期の摺経や仏教版面の流行を経て鎌倉期に寺院による経典や注釈書の出版が盛んになる。

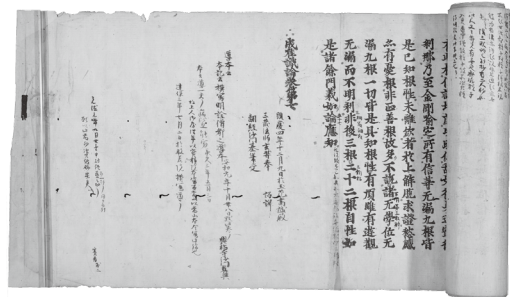
特に奈良では、興福寺が平安後期に春日版とよばれた経典を開版したことを皮切りに、鎌倉期に同寺をはじめ、西大寺・唐招提寺・大安寺・東大寺・法隆寺などで奈良版の仏典が開版された。

奈良以外でも、高野山では高野版、京都では比叡山の叡山版、泉涌寺の泉涌寺版、知恩院を軸とする浄土宗門寺院の浄土教版、さらに禅宗の五山を中心とした五山版、鎌倉の極楽寺の極楽寺版、松谷寺の松谷寺版、称名寺の称名寺版といった寺院版が開版されるなど、日本の出版は仏教の興隆と共に発展・普及したといっても過言ではない。

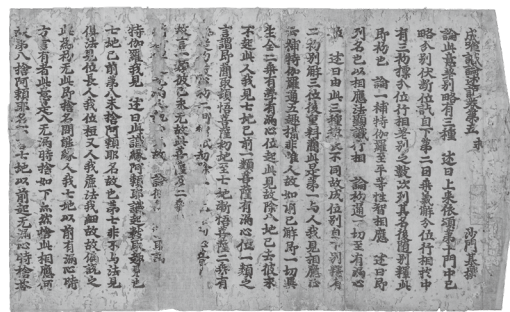
本展示では、同朋大学・名古屋音楽大学図書館収蔵の「山田文昭コレクション」に卷子本形態の「成唯識論」(⑥)世親著「唯識三十頌」に対する護法の注釈を中心に編纂したもので、興福寺法相宗の根本典籍と「成唯識論述記」(⑦)唐窺基による「成唯識論」の詳解)の春日版があるためそれぞれを中心に出版した。

浄土真宗においても、仏書の出版は盛んである。特に本願寺教団の場合、第八世蓮如が教義を平易に説いた消息形式の仮名法語「御文」(⑧)が、子息の実如の時代より真宗聖教として出版され続けている。

⑥(上) 春日版成唯識論卷第七(部分) 一巻 12世紀頃刊
一六八cm×九五.四cm ※同朋学園蔵



⑦(下) 春日版成唯識論述記第五卷末(断簡) 一巻 12世紀頃刊
二七.六cm×四六.三cm ※同朋学園蔵



II 近世・近代の出版と親鸞のイメージ

前章では、日本における仏教と出版との文化的接点は江戸期以前で密接であることを紹介した。それではその関係は江戸・明治期になるとどうなるかといえば、関係がより緊密になる。それは、江戸初期から書肆による仏書の商業出版が活発化したことにも一因がある。そのため、江戸期前半では民間の本屋から出版された本のうちの三点に一点、二冊に一冊が仏書であると試算されているほどに大量の仏書が出版され、また、新しいジャンルの仏書も登場している。

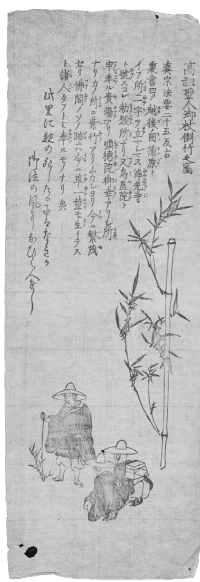
本章では、摺物を含めた浄土真宗関連の近世・近代の出版事情に着目する。特に「親鸞御影を刷る」、「親鸞教学を刷る」の両テーマを設定することで、発行者側のメディア戦略としての親鸞のイメージを考えてみたい。ここで一

例をあげると、親鸞門弟二十四輩の巡拝ブームの影響などで浄土真宗寺院などは様々な「親鸞御影」を出版した(⑧)。(22)。中には、伊勢国山田岩渕の臨濟宗寺院の光明寺が親鸞像安置を説く挿絵入りの由緒書(③)を発行したように、浄土真宗や親鸞とは無関係の宗派も親鸞を宣伝した。このように、親鸞の人氣にあやかった出版戦略が十九世紀代を中心に展開していたのである。

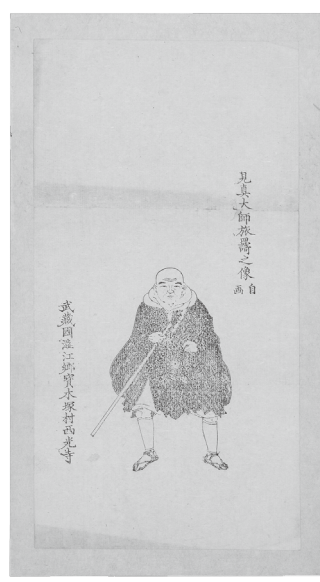
⑧ 親鸞御影「善信坊于九歳之御影」 一枚 19世紀刊
一六.五cm
三三.六cm×一四.一cm



⑨ 親鸞御影「高祖聖人御杖倒竹之圖」 一枚 19世紀刊
四〇.一cm×三三.八cm



⑩ 親鸞御影「見真大師旅籠之像自圖」 一枚 明治期刊
「武蔵国法江郷宝木塚村西光寺」
三〇.五cm×一五.九cm



11 親鸞御影「親鸞聖人」一枚 明治期刊
「陸中国盛岡願教寺法宝物」



15 法然・親鸞俗名御影 一枚 明治期刊
「岩代国信天郡福嶋康善寺法宝物」



19 親鸞御影「旅立真影」一枚 19世紀刊
一五・〇五×一・六五



12 親鸞御影「愚禿親鸞八十三才」一枚 19世紀刊
三四・六〇×一・五五



16 親鸞御影「和朝親鸞聖人」一枚 明治期刊
「岩代国信天郡福嶋康善寺法宝物」



20 親鸞御影「親鸞聖人」一枚 19世紀刊
三三・〇五×一・四六



13 親鸞御影 一枚 19世紀刊
三四・六〇×一・六一



17 親鸞御影「親鸞聖人」一枚 19世紀刊
三三・八〇×一・四八



21 親鸞御影「南無阿弥陀仏」一枚 19世紀刊
「菩提山安樂寺」
二八・七五×一・五六



14 親鸞御影「親鸞聖人善妻喰木像」一枚 19世紀刊
「比叡山無動寺大乘院」
二五・〇五×一・八五



18 親鸞御影「植髮之真影」一枚 19世紀刊
「粟田植髮御堂」
二〇・一五×九・九五



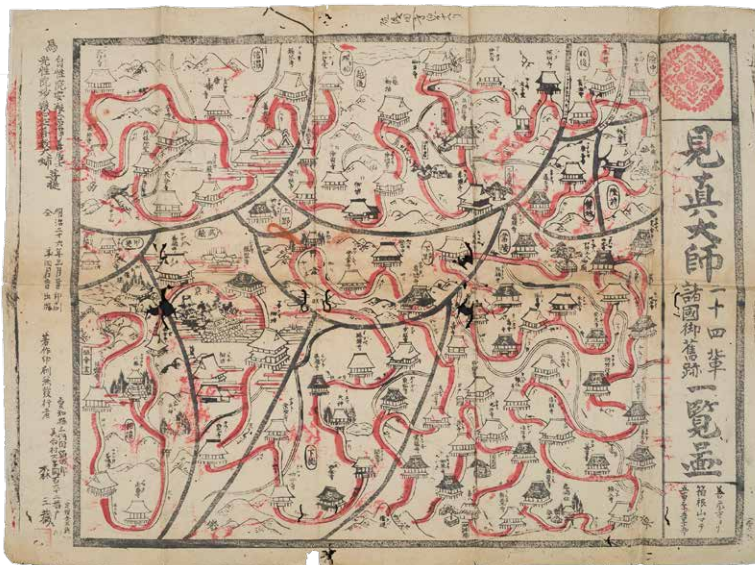
22 親鸞御影「和朝親鸞聖人」一枚 19世紀刊
三四・七五×一・五八



Ⅲ 出版にみる寺社空間とネットワーク

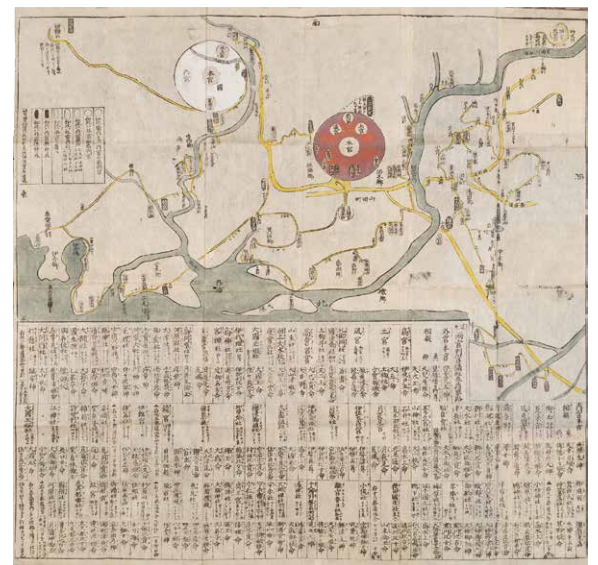
本章では「巡礼・巡拝と出版」、「空間にみる寺社のかたち」のサブテーマを設けて、出版と寺社ネットワークの関係性や寺社の描き方を見てみたい。江戸期になると寺社参詣の一大ブームが生じる。西国三十三ヶ所巡礼・四国八十八ヶ所巡礼などが流行し、さらに写し巡礼と呼ばれる地方巡礼も多数形成された。これらは近現代にも続き、親しまれているものもある。②⑥と②⑦は四国八十八ヶ所納札とその版木である。また浄土真宗系の巡拝（順拝）は二十四輩と呼ばれる親鸞の高弟ゆかりの寺院(②④)や蓮如の旧跡などを巡礼するルートで盛んにおこなわれた。今回は巡拝帳用の摺物から、三河国赤羽御坊(②⑨)と三河国池端蓮成寺(③②)などの寺号の摺物を展示した。一方、神社巡礼にも同様の現象があり、伊勢神宮等への参詣ルート案内図「両宮撰社参詣要路」(③③)には伊勢両宮関連の神社とその祭神の名が記載されるが、寺院の名は記載されていないのは特徴といえよう。他には「両宮撰末社順拝絵図」、「神都一覽」、「諸国内旅雀」などを展示した。

また近世・近代は、寺社の境内鳥瞰図や本堂内部を描いた構図の印刷物等が多数つくられた。これらは、大法要の記念や参詣ガイドパンフのような役割を持ったといえよう。本書では、東本願寺の両堂再建にもなる遷佛遷座を描いた「大谷派本願寺御遷佛遷座式之図」(②⑤)や聖徳太子ゆかりの四天王寺境内図である「天王寺名所付」(③④)、名古屋御坊本堂での大法会の様子が描かれた「祖師六百回御遠忌図」(③⑤)などの構図を扱った。「伊勢服忌令」(③⑥)は、全国から伊勢参宮者が増加したことで出版された伊勢参詣関連の服忌マナー本である。その存在自体が、組織化された伊勢参詣ブームを伝えている。



②④ 見真大師二十四輩諸国御旧跡一覽図 1枚 明治26年(1893)刊

50.0cm×69.5cm



③③ 両宮撰社参詣要路 1枚 宝永4年(1707)初版

55.3cm×57.1cm

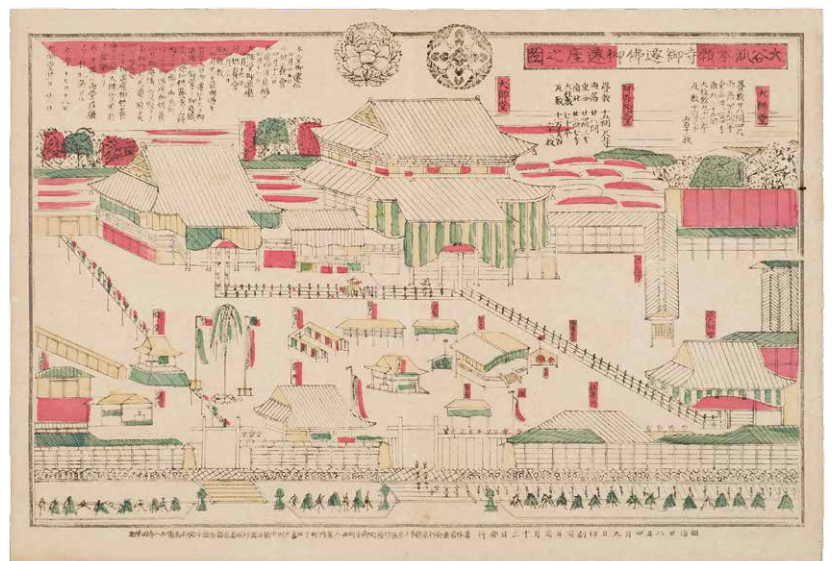


②⑦ 左 四国八十八ヶ所納札版木 一枚 江戸後期

113.0cm×48.8cm×0.9cm

②⑥ 右 四国八十八ヶ所納札 一枚 文政4年(1821)刊

114.3cm×56.6cm



②⑤ 大谷派本願寺御遷佛御遷座之図 1枚 明治28年(1895)刊

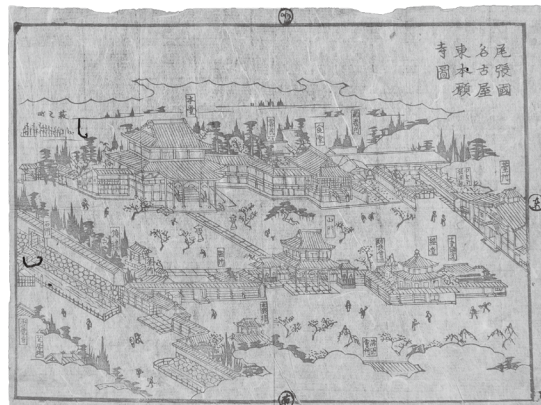
37.1cm×54.1cm



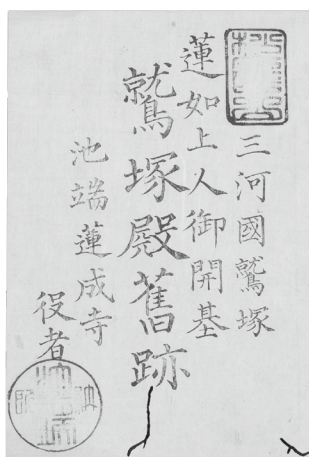
30 伊勢御師内山大夫銘千度御祓大麻版木 一枚 江戸後期 二八七cm×六五cm×四〇cm



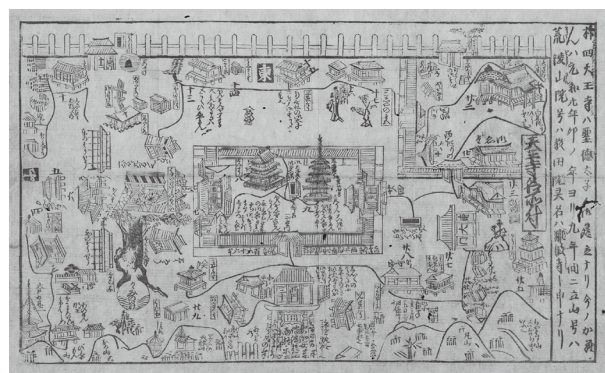
29 赤羽御坊摺物 一枚 江戸後期刊 三三八cm×一六〇cm



28 尾張名古屋東本願寺図 1枚 文政6年(1823)頃刊 3.6cm×23.1cm



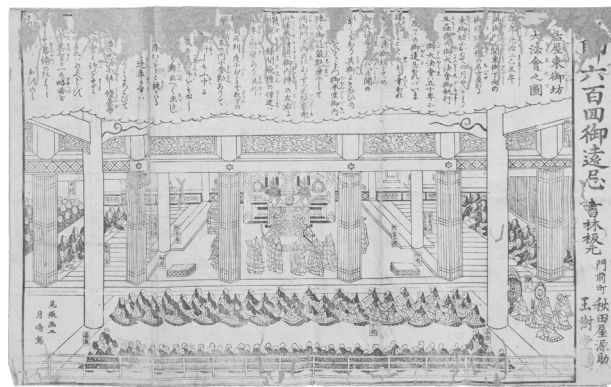
32 池端蓮成寺摺物 一枚 江戸後期刊 三二四cm×一五五cm



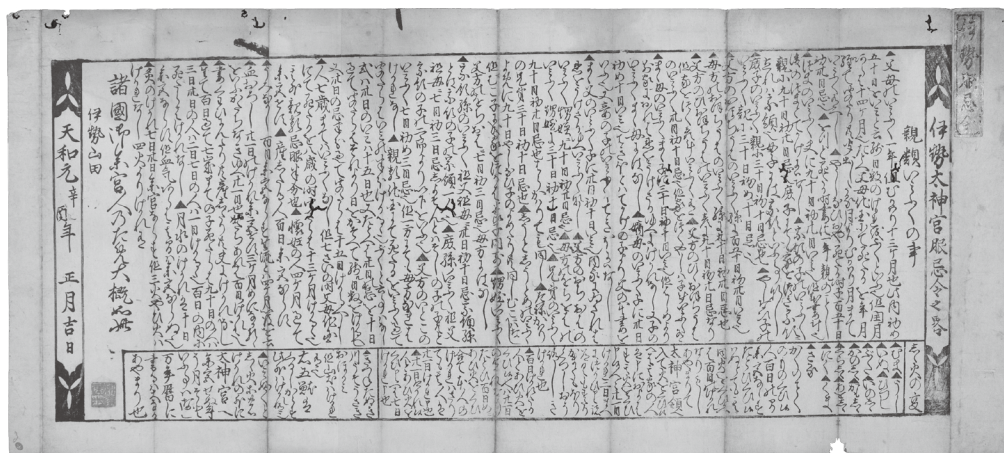
31 天王寺名所付 一枚 江戸後期刊 二八八cm×四五二cm



34 外宮遷御図版木「当宮遷之図」 1枚 嘉永2年(1849) 36.5cm×66.8cm×3.8cm



33 祖師六百回御遠忌図 1枚 元治2年(1865)刊 29.7cm×48.3cm



35 伊勢服忌令 一枚 天和元年(1681)刊 一七三cm×六一三cm

IV 神仏を感じる身近で意外な摺物

前近代には、神仏関連の印刷物は多数存在し、それが気づかれないほどに日常生活に溶け込んでいる場合もあった。その中には、現在ではあまり神仏との接点がいメージできない摺物も存在する。本章では「お札とお札」と「暦のなかのホトケ」という節を設け、江戸・明治期の紙幣と暦をイメージがしにくい出版物の代表例として紹介したい。

そもそも日本紙幣の始まりは、公的紙幣の藩札に先行した私札(民間紙幣)として慶長後半期に伊勢国の伊勢神宮外宮門前町山田で誕生した山田羽書(37)とされる。神札がルーツともされるように山田羽書は、券面には「伍大力菩薩」印や大黒天像などの七福神像といった印がみられ、形状は寺社のお札に酷似する。そのみならず、和泉国堺の木地屋銀札(36)に「天照皇太神宮宇」印や大黒天像の印があるなど、他の私札や藩札にも富の象徴の福神としての恵比寿や大黒といった神仏の意匠の印が採用されている。また、西本願寺が「龍谷末葉改革融通」印のある六條御殿札(38)、さらに船場御坊(現真宗大谷派姫路船場別院本徳寺)が船場預切手(39)といった寺院札を幕末維新期に発行するなど、各寺社は私札(寺社札)を発行した。このように、実は近世の紙幣は神仏と関係が深いのである。

一方、暦は鎌倉末期に、出版された版暦が登場する。室町期には京都の京暦のほか、伊豆の三島暦や奈良の陰陽師が発行した南都暦(40)などの地方暦とよばれる暦が摺られている。江戸期においては地方暦のなかでも、伊勢神宮門前町宇治山田で寛永八年(一六三八)から出版されている伊勢暦が最も有名で身近な暦であった。

今回は地方暦の一例に、南都暦や伊勢暦を展示したが、これらの発行には陰陽師が関わり、また三鏡宝珠が描かれるなど、版面には神仏の意匠といった宗教的要素が意外にも多く含まれている。

36 木地屋銀札 一枚 元和8年(1622)刊



一六三〇×五二二

37 山田羽書見本刷等覚書(部分) 一冊 江戸中期



二七〇四×一九八

38 六條御殿札 一枚 江戸末期刊



一六三〇×四一三

39 船場預切手 一枚 明治初年刊

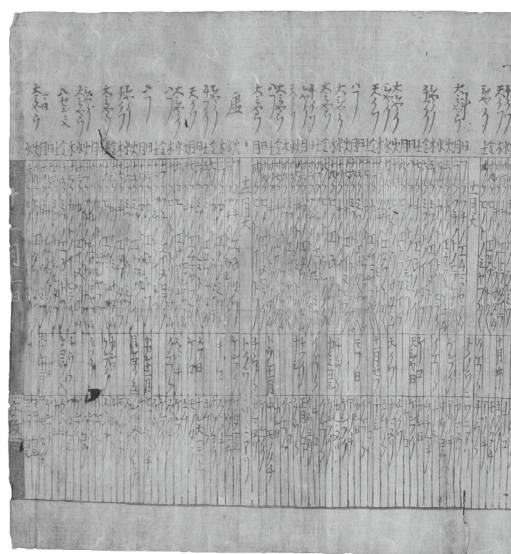


一五九〇×四一三

40 南都暦(断簡、巻頭部分) 一枚 寛永5年(1628)



二五〇四×七一三 ※寛永4年藤村安政版か



41 南都暦(断簡、巻末部分) 1枚 寛永5年(1628)頃か

25.0cm×37.2cm ※寛永4年藤村安政版か

『主要参考文献』『おふだこふだ信じるころ』『御師制度廃止一五〇年展 伊勢参宮の先達者たち 隆盛・廃止・その後』『近世京都出版文化の研究』『近世仏教文化文獻の基礎的研究』『近世仏書の文化史 西本願寺教団の出版メディア』『空海からのおくりもの 高野山の書庫の扉をひらく』『実如判五帖御文の研究』『城州古札見聞録』『続・藩札と羽書 MIEのエコマネー』『名古屋の出版 江戸時代の本屋さん』『名古屋の仏教資料編 木版資料よりみる』『日本印刷文化史』『日本中世印刷史』展



同朋大学仏教文化研究所2022年度前期史料展示「すり出されたカミ・ホトケ—出版からみた仏教文化—」

編集・発行:同朋大学仏教文化研究所【〒453-8540 名古屋市中村区稲葉地町7-1 TEL:052-411-1373 e-mail:bc-inst@doho.ac.jp】

発行日:2022年7月9日 印刷:西濃印刷株式会社

【表紙】①顕如判御文(部分) 1冊 16世紀後半刊 26.8×22.2 ※同朋大学仏教文化研究所蔵 ②両宮摂社参詣要路(部分) 1枚

③伊勢山田光明寺蔵親鸞影像由緒書(部分) 1枚 江戸後期刊 28.3cm×40.0cm

④宗祖大師六百五十年大遠忌紀念御式図(部分) 1枚 明治44年(1911)刊 37.1cm×54.1cm

⑤御文 五の三十二 版木 1枚 19世紀刊 23.9cm×41.9cm×2.1cm ※同朋大学仏教文化研究所蔵

【裏表紙】④親鸞聖人絵伝版画 1枚 19世紀刊 48.9cm×37.4cm